



寝床屋の無料配布

・ 同心の憂鬱

……

3

「だからですね、こんな遠いところに見張り所設けたって何にも見えやしねえでしょう」

ビシビシ、と膝を扇子で叩きながら永井が、ひつけとうぞくあらため火附盜賊改の御用部屋で声を荒げる。

「近くに良い場所がなかったんですから、仕方ないじゃありませんか」
まあまあ、と同僚の同心が宥める。

「何言ってるんです。あるじゃないですか！ この船宿ですよ！ ここの二階座敷をですわ……！」

床に広げた絵図面を指さしながら、永井は更に言い募る。

ここ数月お江戸を騒がせた盗人どもを一網打尽にするために、絶対必要な見張り所をどこに設けるかで揉めているのだ。相手は朱引きの外れにある荒れたボロ寺を睥しているらしい。そこまでやつとの思いで突き止めた。

本来なら南北の奉行所が追捕するのだが、大名屋敷と寺社には手が出せない。そう

いう相手には、火附盗賊改が出張る。

火附盗賊改も町方と同じく、与力が居て、その下に同心がいる。そして同心が個人的に抱える部下として手下がいる。永井が使う手下の内の一人在時の情報を探ってきた。それを受けて、永井や別の手下が様子を探ろうとしたが、警戒が強くなり込むことすら難しかった。その盗人たちが次にどのお店を狙うのかも判らない。そのため、まずは連中の動きを掴もうと彼らの動きがよく見えて、見張りやすいところを探していたのだ。

「……ですから、その船宿つてのが問題なんですよ」

「なんだと？ と今にも掴みかかって来そうな永井の苛立ちの顔に首を竦めて、同僚が言いにくそうに言う。

「その……、ですね、榎野様が、ちよつとそこは……と」

「ま……っ、きの……さま……っ！」

永井はその名前を聞いて、ギリギリギリと歯噛みした。

「お役目だと便宜を図ってもらうにも、商いの邪魔をするわけですから、それなりのものを渡さねば収まらないでしょう、とおっしゃってですね」

同輩が上申を槇野から突き返された時の言葉をそのまま繰り返す。彼としてはそう言うしかない。それは判っている。いつまで見張り所として使うのかも判らないというのに、お役目の名の下に座敷を一つ占領されねばならない船宿が被る損害を考えれば、同心の役料では払うのも難しい。だからこそ、組織として必要な行動であることを認めてほしくて頭かしらに具申したのだ。組織として使うのがそれなりの金額となるのであれば、当然使い道も厳しく吟味される。そして厳しく吟味された結果、却下されたのである。

「ほほう。代替えの場所がイヤならこの寒空、寺の雑木林にでもしやがみこめと？」
永井の言葉に含まれた怒気を感じ取ったらしく、同輩が顔色をなくす。

「私に言わないで下さいよお……」

永井よりも年上の同輩が、怒りの勢いに首を竦めた。完全な八つ当たりではあるし、同輩も槇野と永井の両方からけんつくを食らって同情の余地はある。だが、何も得々と槇野の言葉をそのまま繰り返す必要はなからう。アンタも今回のお役目関わってるんでしようが。簡単に言い負けてきやがって。

火附盜賊改は主に火附、博徒、盜賊を取り締まる役目で、そもそもが先手組に課された加役、つまり一時的に任される役職であった。文久二年（一八六二年）以降、火附盜賊改として独立したお役目、つまり専任制になるが、それ以前は先手組との兼役である。一年を通してお役を務めるの本役、火付けなど多忙な時期にだけ任命される加役の二種類があり、永井の仕える頭は本役だ。役目が出来た当初は頭が任命されるごとに、その手足となつて働く与力と同心が弓組、筒組（鉄砲組）から任命されていた。次第に与力十騎、同心三十人の部下を従えるお役目として確立される。それに従い、頭が変わる度にお役目に不慣れな与力や同心が新たに任命されるよりも、慣れた者が残ることが増えていく。永井は火附盜賊改めの同心として残ることを決めた家を出だ。

さて、槓野だ。槓野は火附盜賊改の用人だが、本来は先手組の頭の家臣であり、主の補佐を行う者である。だが、火附盜賊改の場合は、組織全体の用事も用人の職務の範疇に含まれてくる。

寝ているのではないかと思うほどの細い目をしているが、頭が切れて冷静沈着。今の火附盜賊改の懐刀と呼ばれている。それだけならば普通のことだ。

補佐を行う者が優秀なのは、よく聞く話だろう。過去の歴史を見てもそんな例はいくらでもある。

だが、そんな存在が自分の周りにいる場合、一概に有難いとは言いがたい。楨野は非常に優秀だが、それに輪をかけてケチなのだ。もちろん貰える禄には限りがある。その中から、頭の家族、使用人の給金や生活費、用人を含めた本来の頭の個人的な部下たちの給金を確保した上で、役目に必要な資金を用意せねばならない。

永井達同心も、与力もそれぞれ禄を別に貰っているが、生活していくために必要な分を差し引いて、その上で手先や目明しになにがしかの物を払うと、そう金が残るわけでもない。お役目には細々と金が掛かる。誰かに話を聞こうとすれば、幾ばくかでも払わねば口も開かぬ。誰かの行動の後をつけようとすれば、店に入って食べたり飲んだりする必要も出てくる。咄嗟に着物や手拭いを買って身なりを変えることもある。誰かに使いを頼むのも、便宜を図ってもらうにも金が要るのだ。

頭としては、出来るだけ御役目の費用は抑えたい、部下としてはお役目に自由に使える金が多く欲しい。そのせめぎ合いを、楨野はそれはそれは厳しく苛烈に制して行く。特に永井は探索を行う同心の中でも金を多く使う方だったので、探索費の都合に

ついでには毎度苛烈なやり取りをすることになる。

永井が不機嫌に黙り込んで、水茶屋のどこともしれない宙を睨みつけている。暫くそのままでもいたと思うと、不意にちっ、と舌打ちをして、腰掛けた床机の傍らに置かれた皿から、醤油を塗って香ばしく焼いた団子をむんずと掴んでぱくつと頬張った。隣でそんな永井の様子を見ていた朝田は、自分の団子を喰われたことに気付いて、思わず永井の顔と自分の皿を交互に見比べてしまった。

当然ながら、永井の皿はいつの間にか空になっている。

……久ひささんのこう言うところ、変わらないなあ。

朝田は嬉しいような、団子を取られて悲しいような気持ちになる。

小さい頃も、わずかなオヤツを互いに仲良く分けたものだが、最終的に永井に取られていることも多かった。

朝田は永井の幼なじみで、同じ組屋敷で育った永井を兄のように慕っている。それ

それ親の跡を継いで、朝田は与力、永井は同心と、立場も仕事内容も変わってしまったが、それでも兄のような存在と言う気持ちは変わらない。

そんな朝田に

「立場をよく弁えろ」

と事あるごとに永井が諭すが、今のように時に幼い時のクセが出ることもある。

「久さ……、永井さん」

昔の呼び方で声を掛けそうになって、朝田は一瞬迷う。今はお役目だろうか。それとも見廻りと称して役宅を飛び出し、茶店で団子をやけ食いしているくらいだからお役目じゃないのだろうか。判らなくなって、結局苗字で呼ぶ。

団子の串を啜えたまま、永井がじろりと朝田を見た。

そして、その剣呑な目つきで、居心地が悪くなり、かつ朝田の腹の底からぞわぞわと恐怖が湧くほどにたつぷりと睨んだと思うと、永井はちつともう一つ舌打ちをした。

「……判ってますよ。あのお人だって限りある金を、うんうん唸りながらお役目のためにやりくりしてんだ。でも、今回ばかりはあそこじゃなきやア、ダメなんだ」

同心の立場に戻った永井はぐつと前を強い意志で睨み付ける。そして、よっし、と一つ膝をばしんと叩く。腹を決めたらしい。

「一丁、食らわしてくるか」

ぐるぐると肩を慣らすように振り回しながら、永井が立ち上がった。

「食らわすつて……、何をやる気ですか。いくら永井さんが和やわらが強いつたつて、一応上役ですよ？」

「あのですねえ……。何も本当に殴ったりするわけじゃありませんよ。そのくれえの心意気つてことですよ」

慌てる朝田の様子に永井はちよつと呆れたように言つて、不敵に笑つた。

「ごつそさん、勘定イ置いとくぜ」

永井が袂から銭を出して床机へ置く。看板娘が「あーい。毎度オ」と威勢の良い声で答えた。

うん、私の団子を食べた分は出してくれないんですね。兄貴分の理不尽は健在のようだ。

「あつ、ひ……。永井さん、待つてくださいよう」

はつと置いてけぼりを食ったことに気が付いた朝田が、慌てて永井の後を追いかけてようと立ち上がる。

「チヨイト、お勘定。お忘れじゃありませんよねエ？」

看板娘の食い逃げは絶対に許さないと言わんばかりの剣呑な言葉に、そうだったと気付く。朝田はアワアワしながら懐から財布を取り出し、銭やら小粒やらを地面に落としながら、ようよう支払いを終える。

「もう、久さんてば！ 待っててくださいよう」

その間にも永井はスタスタと境内を出て行ってしまっていた。朝田は小さい頃のよう後ろからあたふたと追いかけた。

了

1213# エアブー Dec.2020

寝床屋の無料配布

2020/12/13 刊

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: nedocoya@gmail.com

Twitter: @nedocoya4pr

ようこそお出で下さいました。
この度はお手に取っていただき有り難うございます。

丁稚は火附盗賊改めが大好きで、つい色々書いて
しまいます。剣豪とかやっとう成分少な目でやっている
つもりなのですが、たまに炸裂してしまう模様……。
色々調べてはいるのですが、まだ調べきれていない
事も多く、やや捏造が多く入っています（汗

寝床屋は、江戸時代を中心にあんまり剣豪とかが
出てこないお話を、番頭さんことかわなをと、
丁稚こと扇坊の二人で書いております。

少しでも楽しんでいただければ幸いです。

* おねがいとおことわり *

本書について、以下の行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

- ・ 有償無償を問わず、本書の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する行為。
- ・ 本書を有償にて再配布する行為。

本書の内容は今後の頒布物に収録される場合があります。また、その際にサイトでの掲載を取りやめる場合がございますので、予めご了承くださいませ。

本書は無料配布として作成したものです。